

【研究ノート】

中山間地域の高校生の親が理想とする子の将来 —地元定着という「チャレンジ」とジェンダー差—

片岡佳美

（島根大学法文学部）

摘 要

本稿の目的は、鳥根県の中山間地域に住む高校生の保護者を対象に実施したアンケート調査のデータを用いて、保護者が子の将来についてどのように考えているかを考察することである。調査の結果、男子生徒の親は女子生徒の親よりも、子が高校卒業後も地元に残ると考えていることが分かった。また、男子生徒の親のほうが子に地元に残ってほしいと思っており、女子生徒の親のほうが子に少なくとも一度は大都会へ出てほしいと願っている。

一方、男子生徒の親も女子生徒の親も、子には地元貢献し、チャレンジする人生を送ってほしいと願っている。しかし、女子学生の親はチャレンジする生き方を安定した生活と対立するものと捉え、男子学生の親はチャレンジする生き方を大学進学や安定した職業を選ばないことと結びつける傾向がある。また、男子学生の親が子にチャレンジする生き方を望む場合、その子は高校卒業後も地元に残ることを選択する傾向があることが示唆された。

本稿は、中山間地域では、現在の競争社会の価値観に挑戦する新しい価値観の追求が展開しているということ、そしてそれは男性にしか奨励されないかもしれないということを示唆した。

キーワード：中山間地域、高校生の親、競争社会の価値へのチャレンジ、ジェンダー

1. はじめに

山に囲まれ自然豊かであるが、コンビニは町に数件しかなく、しかも「24時間営業」ではない。大型ショッピングモールもない。学習塾もない。そして、若者にとって魅力的な仕事もあまりない。交通の便も悪く、県庁所在地の松江市には車で2時間半、広島市のほうが近いが、そこに行くのも車で1時間半ほどかかる。そのような条件不利地域、鳥根県の中山間地域 X 町に、県立 Y 高校がある。本稿の目的は、この Y 高校生の保護者を対象に2023年に行なった調査票調査の結果をもとに、親たちが子の将来についてどのような期待や理想をもっているかについて考えることにある。

筆者は、2021年に Y 高校の生徒 8 名にインタビュー調査を行なったことがある。地元出身

の生徒はそれぞれ高校卒業後の進路として大学進学(ただし島根県内)、専門学校進学、就職(X町内)などを挙げていたが、どの進路にせよ、親からは「一回は都会に出てみんさい」などと、広島市、あるいは東京などの大都市へ出てみたほうがよいと言われたことがあった。ただし、生徒たちの話では、だからと言って親たちは子を都会に送り出したいと強く思っているわけではなく、むしろ子の将来にとって何がよいのか分からないという状況で、子へのアドバイスでも言葉少なであるようであった。そのため親が「一度は都会に」と言うのも、子には、強い圧力とは感じられていなかった(片岡・吹野 2023)。

中山間地域の親たちにとって、息子や娘のよりよい将来とはどのようなものなのか。子が都会に出ること、あるいは逆に条件不利地域である地元に残ることは、どのように捉えられているのか。そして、子の将来についての親たちの理想や期待は、子の移住・定住の選択にどのように影響するのか。本稿では、これらについて考えてみたい。

2. 「地方」の中での多様性

調査データの分析にあたって注目したいことが2点ある。1点目は、地方は地方でも中山間地域という条件不利地域ならではの特徴や傾向をつかむことである。

2010年代頃から、地方での暮らしをポジティブに捉え、地元にとどまる地方の若者に注目する研究が目立つようになった(たとえば、阿部 2013, 轡田 2017, 竹内 2023など)。それらの研究では、地方は地方でもいわゆる地方都市ならではの、あるいは条件不利地域ならではの若者の生き方の特性がそれぞれ描き出されたが、親たちの思いについてはどうなのだろうか。とくに条件不利地域の親の思いが気になる。

筆者は、2015～16年に島根県内の高校に通う子をもつ親たちにインタビュー調査を行なった。これらの親たちは松江市など、非山間地在住であった。インタビューでは「子には広い世界を経験してよりよく成長してほしい、こんな狭い田舎で井の中の蛙になるのではなく都会という広い世界を知るべきだ」という理想を語るのを何度も聞いた(片岡 2020)。地方より都会のほうが何でも揃っていて魅力的であるという認識が根底にあるためであるが、これはY高校の生徒の親たちが「一度は都会に」というのと同じであろう。

ただし、2015～16年のインタビュー調査の対象であった親たちは、実際に子を都会の大学に送り出すことにも熱心であった。都会より地元がよいとか大学に行かないという子には繰り返し都会の大学への進学を薦め、都会の有名な大学に入学できるように学習塾などにもお金をかけていた。これらの親たち自身、比較的高学歴であり、かつ、島根県は島根県でも松江市など市部(地方の小都市)で「進学校」と呼ばれる高校に子を通わせている、どちらかという教育熱心で、子がエリート・コースを進むことに関心をもっている人であった。そうした親たちには、大学受験や就職活動といった競争の激しい社会の中でわが子ができるだけ有利な状況に立ってほしいという強い思いがあるのだろう、かれらは、子を都会の大学に進学させることを子育てのゴールのように認識していた。「よい大学」や「よい職業」、そしてそれらに到達するために有利となるものが多数ある都会に出ていくことと、「広い世界(都会)を知ることは大事だ」という理想がぴったり合致し、親たちは子を都会に送り出すことに一層熱心になるよう

あった(片岡 2020)。

それに対し、中山間地域の Y 高校の親たちは、広い世界を知るために「一度は都会を」とは言っているものの、子の大学進学についてはこれらの市部の進学校の生徒の親たちに比べるとそれほど強い思いをいだいていないかもしれない。というのも、鳥根県では X 町のような中山間地域の場合、受験競争を意識して中学卒業時点で地元を離れ、つまり地元の高校には入学せず、市部の進学校に入学し寮で生活するという生徒も一定数いる(付け加えて言うと、生徒数の少ない中山間地域の高校では部活動の種類が少ないため、自分のやりたい部活動がある、町外より大きな高校に進学するケースもある)。また、そもそも大卒者に人気のある就職先が松江市などの県内市部よりもさらに少ない中山間地域では、高学歴の親も相対的に少ないであろう。親自身が高学歴であるほど、子にも高学歴を希望する傾向があると考え、Y 高校の生徒の親たちは、進学校の生徒の親たちに比べると、子の大学進学にあまりこだわらないとも考えられる。冒頭で触れたように、Y 高校の生徒の親たちの「一度は都会を」という声はそれほど強いものではないということだったが、かれらにおいては、大学進学を強調しない分、「広い世界を知る」ための都会経験を子に訴える理由や目的が明確になりにくいいため、「一度は都会を」もトーンダウンする傾向があるということなのかもしれない。

X 町のような中山間地域の Y 高校に通う生徒の親たちは、子にどのような将来を希望するのか。分析では、その点に注目する。

3. 女子と男子の違い

分析での注目ポイントの 2 点目は、子の性別による親の意識の違いである。

筆者が 2021 年に Y 高校の生徒に行なったインタビュー調査は、いくつか興味深い事例があった。たとえば、「とくに都会に出て何かやりたいという考えもないので、地元で早く結婚したい」と述べる女子生徒がいた。この生徒は、大学に入って 4 年間もお金を稼がない生活を送るより、その期間も働いて結婚資金を貯めたほうが理に適っているとも語った。母親は、最初は「一度は都会を」と言っていたが今はこの生徒の考えを支持し、応援してくれているということであった。また、別の女子生徒は、高校卒業後の進路について親から何でもやりたいことをすればよい、一回都会に出てもよいとも言われているが、やりたいことが分からないという。はじめはスポーツ推薦で大学に進学したいと思っていたが、自分のレベルは地元では優秀であっても全国的には通用しないしスポーツ推薦も難しいということを知らされ、目標を失った。親からは、目標が不明確なまま県外に出て行くのはだめだと言われており、新たな目標が見つからないなら地元に残るしかないと思っているとのことであった。

一方、男子生徒の中には、自分の将来について具体的なイメージをもって語る生徒がいた。この生徒は、将来は X 町でスポーツトレーナーになって地元地域の子どもや高齢者の健康のために働きたいと言った。その資格を取るため一度は県外の専門学校に行くことになるが、必ず X 町に戻ってくるつもりだという。「地元で地域貢献」という進路選択には、親の影響も強く受けているということであった。親はこの生徒を小さい頃から大人として対等に扱ってきており、地域の宴会で大人どうしが本音で議論するのを見せたり、また、そうした議論にこの生

徒を参加させたりもしたという。そうしたなかで、次第に自分は比較的若いうちから地域住民の一員であると強く認識するようになり、この地域こそ居場所だと思えるようになり、ぜひこの地域の役に立ちたいと思っているということであった(片岡・吹野 2023)。

もちろん、ごく少数の事例では全体的な傾向について述べることはできない。将来の進路が定まらないため半ば妥協的にか地元に残ることを考えているのが女子で、地元の地域に貢献するために一度都会に出るというコースを主体的に選んだとはっきりと語るのが男子であるとか、それらに親の影響が見られたというのは、たまたまのことであった可能性もある。とはいえ、地方の子が都会に出ること、地元に着することをめぐっての親の希望や理想は、子の性別によって異なってくるというのは、これまでも指摘されてきたことであった(ただし、それらの議論では、地方の中の多様性よりも「地方 vs. 都会」の差異が強調されており、地方は大括りに捉えられがちである)。

たとえば、女子の大学進学が珍しくなくなってきた今日でも、地方では、女子が県外の大学に進学しようとする、明確な目的、すなわち「何のための大学進学か」といった大義名分が、男子や大都市圏の女子よりも強く求められがちであり、ハードルが一層高くなるという指摘もある(寺町 2022) (先に挙げた、スポーツ推薦での大学進学を諦めた事例の親も、娘に大学に進学する目的をはっきり述べるよう求めていた)。

また、石川由香里(2011)は、新潟市・福岡市・長崎市の就学前児・小学生・中学生の親を対象にした調査データから、地方の母親が、男子に対しては経済的・精神的独立を重視するために地元を出て大学進学に送り出すことを考え、女子に対しては大学に進むにしても男子に対してのように独立を求めず、地元の大学に進学し地域に残ることを期待する傾向があることを示した。ここでは、女子へのこうした期待の背景には、女性＝ケアの担い手という認識から生まれる、母娘間の「世話する／世話される」互助的関係を維持していきたいという意識も働いているのではないかと考察されている。この調査研究の対象は、上に述べたように地方は地方でも地方都市の母親であり、中山間地域ではどうであるか、調べてみたい。

家の後継ぎという要素も注目されてきた。戦前の家制度では後継ぎの男子(長男)には家に残ることが期待された。しかし戦後になると、男子(長男)への期待は変化したようである。奥井亜紗子(2016)によれば、戦後、学歴主義が浸透していくにつれ、長男にこそ都市部で高い学歴をつけさせ、そしてそのまま都市部で近代的・安定的な職業に就かせ、土地・家屋や家業というよりは、家の社会的地位、出自、家系、墓地を守らせるという後継ぎ戦略を採る地方家族も出現したという。地域や家にとどまるのではなく、むしろ都市部に出ることによって得たお金と名誉で、ふるさとの家の(土地などの有形の財ではなく)シンボリックな財を守っていくという家の戦略である。

もちろん、今日では地方においても家というものへのこだわりや意識もずいぶん希薄になってきているだろう。しかし、筆者らが2019年に島根県松江市の高校3年生に実施した調査では、「家の後継ぎになることを考えたことあるか」という問いに対し、男子生徒の回答「そう思う」は12.9%、「ややそう思う」は14.3%で、約4分の1が肯定的回答であった(ちなみに女子生徒では、それぞれ順に3.5%、4.9%であった)(片岡・吹野 2023)。男子における後継ぎ意識は、

親たちの期待を反映しているとも考えられる。今日もこうした親たちが、後継ぎとしての息子に立身出世やエリート・コースへの関心や期待を寄せ、「都会の大学に」を強調しているのが気になる。

このように地方では、都会に出ることは男子のほうにより強く期待され、地元に着定することは女子のほうに求められるということが言われてきた。しかし、地方は地方でも中山間地域(条件不利地域)に限定して見たときも、やはり同様の傾向になるのか。あるいは、そのような傾向がさらに強まるのか。その点も、調査データの分析を通して探してみたい。

4. 調査データの概要

Y高校の生徒の親においては、県内市部の進学校の生徒の親とはまた異なる思いをもっている人も少なくないと思われる。かれらは子に高校卒業後どのようなコース(都会の大学に進学し就職する、地元に残って就職する、あるいは一度県外に出て地元に戻る…など)を選んでほしいと思っているのだろうか。また、それは、子の性別で変わってくるのか。そして、かれらの子に対する希望や理想が、子の将来選択にどう影響しているだろうか。調査票調査のデータをもとに、それらの点を考える。

調査票調査は、2023年9月、鳥根県のX町の県立Y高校1・2・3年生(寮生を除く)の保護者に対して行なった。Y高校には、普通科と産業技術科があり、2023年度の全学年の生徒数はそれぞれ174名、99名である(定員は180名、105名)。調査票は、Y高校に依頼し、生徒(自宅生)を通じて配布・回収した。122件の回答を得たが、今回は自宅生でもX町およびその周辺市町村(鳥根県内)に居住し、父母の回答のみを分析対象としたため(祖父母などの回答ケースを外した)、データ数は116件となった。

なお、Y高校の「令和5年度学校要覧」によれば、X町の中学校出身の生徒(両学科全学年)で144名、周辺市町村(県内)の中学校出身の生徒(両学科全学年)は42名で、合計186名である。また、自宅生(両学科全学年)は179名ということである。これらの中には、兄弟姉妹もY高校に通っているというケースも含まれる。本調査では、兄弟姉妹がいる場合には年長の子について回答してもらっており、同一の保護者が2回以上回答することはない。

分析対象のうち、父親は21ケース(18.1%)、母親は95ケース(81.9%)であった。子(生徒)の性別内訳は、男子48ケース(41.4%)、女子67ケース(57.8%)、無回答が1ケース(0.9%)、学年内訳は1年生36ケース(31.0%)、2年生42ケース(36.2%)、3年生37ケース(31.9%)、無回答が1ケース(0.9%)であった。

5. 分析結果

調査票では、現在Y高校に通う子が高校卒業後、今住んでいる地域に暮らしていると思うか、「そう思う」から「全くそう思わない」までの5件法で尋ねている。「そう思う」は男子で10.2%、女子で6.0%、「ややそう思う」は男子で14.3%、女子で3.0%、「どちらとも言えない」は男子で28.6%、女子で22.4%、「あまりそう思わない」は男子で20.4%、女子で23.9%、「全くそう思わない」は男子で26.5%、女子で44.8%であった。全体的に地元に残らないという回答

が多数を占めるが、子の性別で比較すると男子のほうが地元に残る可能性が高いと思われる。「そう思う」と肯定的な回答ほど高得点となるように1～5点を配点し、子(生徒)の性別で平均を算出すると、男子は2.61、女子は2.01となり、t検定では有意差が認められた($t=2.597$, $df=114$, $p<.05$)¹⁾。

一方、調査票には、回答者自身が子の将来についてどのような希望・理想をもっているのかを尋ねる項目もある。「高校を卒業したら、都会で生活してほしい」「20～30年後は、親が住む地域で暮らしてほしい」「大学に進学してほしい」「都会で就職してほしい」「地域に貢献する人になってほしい」「早く結婚してほしい」「公務員や大企業など、収入や地位が安定した仕事に就いてほしい」「少々リスクがあっても、やりたいことを積極的にチャレンジする人生を生きてほしい」の8項目について、「そう思う」から「全くそう思わない」までの5件法で尋ねている。これらについても「そう思う」と肯定的な回答ほど高得点となるよう、1～5点を配点し、その平均を回答者の子(生徒)の性別で比較してみた(表1)。t検定では有意差が認められたのは(有意水準を10%水準までとすれば)、「高校を卒業したら、都会で生活してほしい」($t=-2.067$, $df=112$, $p<.05$)、「安定した仕事に就いてほしい」($t=1.673$, $df=112$, $p<.1$)で、前者は女子の平均のほうが高く、後者は男子の平均のほうが高い。それ以外の希望や理想については、子の性別による差は統計学的に有意ではなかった。

生徒の性別に関係なく、とくに平均が高かったのは、「地域に貢献する人になってほしい」「少々リスクがあっても、やりたいことを積極的にチャレンジする人生を生きてほしい」であった。「都会で就職してほしい」の平均は、それらに比べると低い値であった。

表1 子の将来についての希望・理想(子の性別での平均比較)

		卒業後都会 で生活して ほしい	20～30年後 親の住む地 域で暮らし てほしい	大学に進学 してほしい	都会で就職 してほしい	地域に貢献す る人になっ てほしい	早く結婚し てほしい	安定した仕 事に就いて ほしい	チャレンジす る人生を生 きてほしい
生徒性別	男子	2.85	3.42	3.35	2.65	3.88	3.15	3.52	3.71
	女子	3.26	3.23	3.47	2.80	3.73	2.94	3.18	3.98

親は、息子よりも娘に対して、高校を卒業後都会で生活することを理想とする。そして実際に、女子生徒のほうが男子生徒よりも「卒業後、今住んでいる地域にいないだろう」と見なされている。このことは、これまでに指摘されてきた「地方では、地元に残るのは男子というよりは女子」という傾向とは異なっている。

「地域に貢献する人になってほしい」とか「チャレンジする人生を生きてほしい」などといったことは、子の性別に関係なく重視されている。それなのになぜ、男子のほうが「卒業後は今住んでいる地域」なのだろうか。

これについては、「地域貢献」や「チャレンジ」に込められる意味が、子の性別で異なるからなのかもしれない。そこで、子どもの将来についての希望・理想を尋ねた8項目について、生徒の性別ごとに因子分析を行なった。その結果、表2・3に示すように、子の性別で結果は異なった。男子生徒の場合、第1因子には「都会で就職してほしい」「高校を卒業したら、都

会で生活してほしい」が、第2因子には「地域に貢献する人になってほしい」「早く結婚してほしい」「20～30年後は、親が住む地域で暮らしてほしい」が強く影響していた。第1因子は都会志向を表す因子と見なせるだろう。それに対して第2因子は地元志向と見なせるが、「早く結婚」も強く影響していることから、地元定着志向と言ってよいだろう。そして第3因子には「少々リスクがあっても、やりたいことを積極的にチャレンジする人生を生きてほしい」「公務員や大企業など、収入や地位が安定した仕事に就いてほしい」「大学に進学してほしい」が強く影響している。ただし、「安定した仕事」と「大学に進学」の因子負荷量はマイナスの符号をつけている。つまり、ここでチャレンジ志向とは、やりたいことを積極的にチャレンジすることと同時に、公務員や大企業に就職しない、大学に進学しないという生き方(ある意味で挑戦的な生き方)と関連するのである。ここではこの第3因子をチャレンジ志向を表す因子とする。

表2 親が子に期待することの因子分析(子の性別=男子)

	都会志向	地元定着志向	チャレンジ志向
都会で就職してほしい	.997	-.137	-.078
卒業後都会で生活してほしい	.746	-.004	-.014
地域に貢献する人になってほしい	.006	.722	-.026
早く結婚してほしい	.067	.651	.084
20～30年後親の住む地域で暮らしてほしい	-.308	.643	-.024
チャレンジする人生を生きてほしい	.217	.253	.697
安定した仕事に就いてほしい	.293	.373	-.505
大学に進学してほしい	.116	-.038	-.289

主因子法(プロマックス回転) 累積寄与率52.041%

表3 親が子に期待することの因子分析(子の性別=女子)

	都会志向	地元志向	安定志向	大学進学志向
卒業後都会で生活してほしい	.882	.075	-.092	.017
都会で就職してほしい	.745	-.198	.139	.107
地域に貢献する人になってほしい	.018	.901	.119	.014
20～30年後親の住む地域で暮らしてほしい	-.098	.459	-.044	.124
安定した仕事に就いてほしい	-.125	-.073	.682	.157
チャレンジする人生を生きてほしい	-.181	-.093	-.438	.293
早く結婚してほしい	-.019	.131	.290	.020
大学に進学してほしい	.117	.123	-.059	.771

主因子法(プロマックス回転) 累積寄与率51.500%

一方、女子生徒の場合は、第1因子は都会志向、第2因子は地元志向、第3因子は安定志向、そして第4因子は大学進学志向を表す因子として捉えられよう。男子と違い女子の母親では、「大学に進学してほしい」は、ここで取り上げた他の希望・理想と結びつかない。また、「チャ

レンジする人生」は「安定した仕事」「早く結婚」と因子負荷量の正負が異なり、チャレンジは安定と対立するもの、つまり安定にとってマイナスになるものとして捉えられている。

では、息子あるいは娘の将来についての親の理想や希望は、子の定住・移住の選択にどのように影響しているだろうか。これを調べるため、各因子に強く影響していた項目の得点を合計し、新しい変数をつくった。すなわち、男子生徒についての因子分析の結果で、第1因子に強く影響していた「都会で就職」「卒業後都会で生活」の合計得点から「都会志向(男子)」変数、第2因子に強く影響していた「地域で貢献」「早く結婚」「20～30年後地域で」の合計得点から「地元志向(男子)」変数、そして第3因子に強く影響していた「チャレンジする人生」「安定した仕事(否定的な回答ほど高得点になるように値を逆転)」「大学に進学(否定的な回答ほど高得点になるように値を逆転)」の合計得点から「チャレンジ志向(男子)」変数をつくった。女子生徒については、女子についての因子分析の結果で第1因子に強く影響していた「卒業後都会で生活」「都会で就職」の合計得点から「都会志向(女子)」変数、第2因子に強く影響していた「地域に貢献」「20～30年後地域で」の合計得点から「地元志向(女子)」変数、そして「安定した仕事」「チャレンジする人生(否定的な回答ほど高得点になるように値を逆転)」「早く結婚」の合計得点から「安定志向(女子)」変数、第4因子に強く影響していたのは「大学に進学」だけであったのでこの項目の得点だけで「大学進学希望(女子)」変数をつくった。「子が高校卒業後、今住んでいる地域に暮らしていると思うか」の得点を従属変数とした重回帰分析に、これらの変数を投入した。表4は男子生徒の親のデータ、表5は女子生徒の親のデータの分析結果である(モデル1)。それぞれの表には、コントロール変数として回答者自身の「政令指定都市での生活経験」(「ある」を1,「ない」を0としたダミー変数)を追加したモデル2、それにさらに「母親である」(回答者が生徒の「母親」であれば1,「父親」であれば0としたダミー変数)を追加したモデル3も併記した。

男子も女子も、コントロール変数として投入した「政令指定都市での生活経験」「母親である」の従属変数に対する効果は有意ではなかった。男子では、モデル1からモデル3まで一貫して「チャレンジ志向」が効いている。親から子へのチャレンジへの期待が、子の地元定着に強い影響をもっていることを示唆している。女子では、「都会志向」「地元志向」が効いている。ただし、「都会志向」の係数の符号はマイナスである。親が子に都会ではなく地元にいることを望むことが、子の地元定着により強く影響するということがうかがえる。ただし、女子については、高校卒業後地元に残らないという回答がより多かったことをふまえると、この重回帰分析の結果については、親が都会志向で地元志向でないことが女子の地元流出を進めるという関係のほうに注目したほうがよいだろう。

表4 「子が高校卒業後も地元にいる」と思う程度を従属変数とした重回帰分析(子の性別=男子)

	標準偏回帰係数		
	モデル1	モデル2	モデル3
都会志向	-.145	-.094	-.087
地元志向	.176	.204	.193
チャレンジ志向	.334 *	.343 *	.374 *
政令指定都市での生活経験		-.071	-.078
母親である			-.115
調整済み R ²	.137	.129	.121
F 値	3.436 *	2.665 *	2.236 †

† p<.1, * p<.05

表5 「子が高校卒業後も地元にいる」と思う程度を従属変数とした重回帰分析(子の性別=女子)

	標準偏回帰係数		
	モデル1	モデル2	モデル3
都会志向	-.280 *	-.303 *	-.302 *
地元志向	.292 *	.263 *	.274 *
安定志向	-.031	-.020	-.279
大学進学希望	-.056	-.074	-.076
政令指定都市での生活経験		.126	.122
母親である			-.121
調整済み R ²	.155	.157	.158
F 値	3.992 **	3.413 **	3.036 *

* p<.05, ** p<.01

6. まとめと若干の考察

結果をまとめておこう。まず、子が高校卒業後、今住んでいる地域に残っていると思うかどうか尋ねた結果は、男子でも女子でも地元に残らないと思う親が多くを占めたが、子の性別で比較すると男子のほうが残り、女子のほうが残らないという回答の割合が大きかった。そして、親自身も、男子より女子に対してのほうが、卒業後は都会で生活してほしいと希望する割合が大きかった。ただし、都会で就職することは、男子にも女子にも、あまり求められていなかった。女子には「一度は」都会を経験してほしいと思うが、都会にずっといてほしいというわけではないようである。

一方、「地域に貢献する人になってほしい」や「チャレンジする人生を生きてほしい」は、男子にも女子にも重視されていた。しかし、チャレンジする人生を生きることは、女子の親では、安定した生活を送ることと対立するものと捉えられるのに対し、男子の親では、大学に進学しない生き方や安定した仕事に就かない生き方と関連づけられるものであった。そして、男子の場合、親のこうしたチャレンジ志向が強いと、高校卒業後地元に残るだろうと認識される

傾向が高まるのであった。

親たちは、男子に地元定着を望み、むしろ女子に対していったん都会に出ることを希望する。これは、従来述べられてきたことと正反対の傾向である。しかも今回の調査結果では、男子の地元定着は、学歴重視とは対立する価値観に基づく挑戦的な生き方として評価されることもうかがえた。このことは、地方は地方でも中山間地域であることが影響しているのではないだろうか。最初に述べたように、中山間地域のX町は、資本主義的な価値基準や競争原理から見れば、圧倒的に条件不利地域である。それに対し大都市は、大学進学や就職をはじめ、社会経済的資源をめぐる競争において有利となるさまざまな機会や経験を享受できるところである。地方の者はそのメリットを享受するためには大都市の大学に行かなければならないが、地方は地方でも中山間地域で暮らす者にとっては、そこへ行くこと自体がより大きなコストやハードルと感じられるため、そのコースとは別のコースを探索するように促されるのではないだろうか。

たとえば、学費や仕送りといった費用の問題がある。今回の調査票には、「子どもを都会の大学に行かせるほどの経済的余裕はない」かについて尋ねる質問項目もあったが、その結果は「そう思う」29.8%、「ややそう思う」19.3%と、肯定的回答が半分近くを占めた。さらに、「自分(回答者のこと)が若い頃、親から多くの経済的援助を受けた」かについては「そう思う」23.5%、「ややそう思う」27.0%もあったのに対し、「子どもが成人しても、経済的援助は続けるつもりだ」は「そう思う」7.8%、「ややそう思う」13.0%と少なかった。中山間地域の今の親世代は、その親の世代よりも経済的に厳しいことを示唆するものである。

そして、経済的なハードルを乗り越え子を都会の大学に送り出したとしても、それで子が幸せな生活を実現するかはよく分からない。大学を卒業しても就職できなかったり、大企業に就職してもブラック企業であったり失業したり——そういった話を聞くたびに親たちは何が子にとってよいことなのか自信をもって答えられなくなる。それは都会の親たちも同じであろうが、大学に送り出すコストに加え、都会に送り出すコスト(そこには、学費や生活費の送金だけでなく、子がすぐに帰ってこられない遠方に移住し、親子で共に暮らす家族生活と地域生活が一区切りすることも含まれる)も払わなければならない中山間地域の親たちにとっては、それだけ大きなコストを払う利点がどれだけあるのかという問いがより切実となるものと考えられる。

こうしたコストやハードルのほうがクローズアップされるにつれ、「大学進学のために都会に出る」ことが絶対とは思われなくなり、進学を選択しないという選択肢が見えてくるようになるのかもしれない。しかも、その選択に「チャレンジ」という野心的・意欲的な面を強調することで、不承不承ではなく主体的に選択したという評価がなされる。このことは、お金と時間のかかる高学歴を選ばない人たちの生き方が、今日、中山間地域で肯定されているということを示しているのだろうか。

競争主義的な価値観からそうした生き方を「エリート・コースに進み損ねた落ちこぼれ」とか「低学歴の負け組」などに見下すのではなく、そうした生き方も選択肢の一つであり、かつ社会にとっては重要だという視点は、近年、吉川徹(2018)も「LEGs(Light Educated Guys

＝軽学歴の若年男性)」と呼ぶことを提唱して、強調している。吉川は、地方社会はこうした、大卒とは別次元の価値を追求する人たちによって支えられていると述べる。中山間地域の男子生徒の親たちは、そのような認識をもっているということであろうか。だとすれば、「広い世界を」という理想と都会の大学進学を結びつけて両方の達成を目指そうとする、島根県内市部の進学校の生徒の親たちとは異なった子育て実践が、こうした中山間地域では展開しているということであろうか。

ただし、今回の調査では、親たちが「大学進学を選ばず地元定着する」という選択を、果敢な挑戦として評価するということが示唆されたのは男子に対してであり、女子にはそういうことは見られなかった。女子には、高校を卒業したら「一度は都会に」が男子よりも求められていた。女子にとっては、LEGsとして地元そのまま定着するというチャレンジは、コストやリスクの大きな選択と考えられているのだろうか。「一度は都会に」は、何のためであろうか。

これらの点を明らかにするためには、より精緻な分析が必要である。今回は、地方は地方でも中山間地域という条件不利地域においては、競争主義に対抗するための新たな価値の追求が、男子についてのみ起こっているかもしれないということを示唆したにとどまる。しかし、今後の研究において重要な問いを提示したという点で意義があると考ええる。

【付記】

本研究は、JSPS 科研費 (23K01749) の研究助成を受けている。

【注】

1) ここで用いたような5件法で程度を尋ねる項目については、「そう思う」と「ややそう思う」、「ややそう思う」と「どちらとも言えない」の間隔などがそれぞれ等間隔とは言えないから量的変数として扱うべきでないという意見もありうるが、社会学では、これを間隔尺度として量的変数と見なすことが多い(森岡編 2007)。ここではそれにならって、5件法の項目を量的変数として扱う。

【引用文献】

- 阿部真大, 2013, 『地方にこもる若者たち』, 朝日新聞出版。
- 石川由香里, 2011, 「進学に向けての地域格差とジェンダー格差―背景にあるケア役割への期待―」, 石川由香里・杉原名穂子・喜多加実代・中西祐子編『格差社会を生きる家族―教育意識と地域・ジェンダー―』, 有信堂, 61-80。
- 片岡佳美, 2020, 「親は子どもの県外移住にどのように関与したのか―島根県若年層人口流出と家族実践についての―考察―」, 『ソシオロジ』64(3), 113-129。
- 片岡佳美・吹野卓, 2023, 『都会に出ること, 地元で暮らすこと―島根県高校生・保護者調査から―』, 島根大学法文学部山陰研究センター。
- 吉川徹, 2018, 『日本の分断―切り離される非大卒若者たち―』, 光文社。
- 饒田竜蔵, 2017, 『地方暮らしの幸福と若者』, 勁草書房。
- 森岡清志, 2007, 『ガイドブック社会調査 第2版』, 日本評論社。
- 奥井亜紗子, 2016, 「学歴主義の浸透と農村長男の都市移動―兵庫県篠山市同郷団体会員調査をもと

に一], 『農業史研究』 50, 2-13.

竹内陽介, 2023, 「地方若年層 U ターン者の移動理由と構造的脈絡のすき間—広島県大崎上島の事例から—」『社会学評論』 74(1), 140-157.

寺町晋哉, 2022, 「大学進学における「地方」と「性別」の「足枷」」, 『学術の動向』 27(10), 76-83.

What Do Parents Think Is Ideal for the Future of High School Students in a Mountainous Area? -- “The Challenge” of Settling into their Hometown, and Gender Differences

KATAOKA Yoshimi

(Faculty of Law and Literature, Shimane University)

[Abstract]

The purpose of this paper is to examine how parents envision their children's ideal futures, using data from a survey of parents of high school students in the mountainous area of Shimane, Japan. The results show that parents of male students are more likely than parents of female students to believe that their children will stay in their hometowns after graduating from high school. In addition, parents of male students are more likely to hope that their sons will stay in their hometowns, while parents of female students are more likely to expect that their daughters will move to larger cities at least once.

On the other hand, parents of both male and female students hope that their children will contribute to their hometown communities and seek a challenging life. However, parents of female students often perceive a challenging life as being in conflict with a stable life, while parents of male students typically associate it with not going university and not getting a stable job. Furthermore, it is suggested that when parents of male students express a desire for their children to pursue a challenging life, these students are more likely to remain in their hometowns after graduating from high school.

This paper proposes that the pursuit of a new value to challenge the prevailing norms of competitive society may arise in mountainous areas; however, this encouragement may be limited to men.